

魅力再発見！ わが町の伝統文化

肥後てまり

「あんたがたどこさ、肥後さ、肥後どこさ、熊本さ…」
このフレーズ、“懐かしい”と思う方も多いのではないのでしょうか？
誰もが知っているこのてまり唄は、
実は肥後てまりの普及と共に広まっていったのだそうです。



伝統を受け継ぎ、現在も
さまざまな模様のてまり
が生み出されている

取材協力



熊本県伝統工芸館

肥後てまりをはじめとする、県指定のさまざまな伝統的工芸品90品目を展示しているほか、館内ショップでは肥後てまりなど工芸品の販売や、オーダーの受け付けも行っています。

☒ 熊本市中央区千葉城町3-35

Tel 096-324-4930 Fax 096-324-4942

URL <https://kumamoto-kougeikan.jp/>

てまりは今から一四〇〇年ほど前、中国から日本に伝わったとされています。平安時代には貴族のあいだで蹴鞠など遊戯の道具としてつかわれたり、また神事の祭具としてつかわれたりすることもあったようです。江戸時代になると、武家の女中たちによって華やかな柄のてまりが作られるようになり、江戸後期には「鞠つき」という遊びが登場し、てまりが広く一般に伝わりました。

その頃、肥後熊本藩では加藤家の統治のもと城下町が広く発展していました。その後、芸術や文化に対しても造詣の深い細川家が藩主になったことで、肥後独自の文化や伝統芸能が育まれることになりました。

なかでも装飾性が高く美しい模様の肥後てまりは、「肥後立花」や「亀甲つなぎ」、「麻の葉」などの伝統的な絵柄をはじめ、

糸の組み合わせ次第でさまざまな模様を描くことができることから、現代まで受け継がれてきました。

肥後てまりは、乾燥させたヘチマを芯にして脱脂綿で包み、その上に木綿糸を巻き形を整えて土台を作ります。丸いてまりの形を整えたら、金糸や銀糸で基礎となる線をいれ、カラフルなフランス糸で刺繍をして完成です。明治頃に登場したゴムまりの影響で一時は姿を消してしまいましたが、現在は肥後てまり同好会により、その美しい技が受け継がれています。同好会会長の鶴田美知子さんは「色や線を変えらることで、新たなてまりを作るのが楽しみです」と語ります。

かつては母が娘の健やかな成長を願って、一針一針想いを込めて作られた肥後てまり。現在も、美しく華やかな姿で私たちを楽しませてくれています。